

国 語

第1問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

文学において描かれてきたユートピアの多くは、理想郷ではなく、悪夢のような空間、「ディストピア」(dystopia)の名にふさわしいものを読者に示してきました。たとえば、サミュエル・バトラーの『エレホン』やオルダス・ハクスレーの『すばらしい新世界』、さらに、ジョージ・オーウェルの『一九八四年』やアーサー・ケストラーの『真昼の暗黒』、さらに、フィリップ・K・ディックの『高い城の男』など、一九世紀後半以降に範囲を限るなら、ユートピア小説の大半は、事実上のディストピア小説と見なすことが可能です。

とはいえ、これらの小説が描くディストピアは、ユートピアと対立するものではなく、転倒したユートピアでもありません。ディストピアとは、ユートピアと一体をなすその裏面なのです。A  
「というのも、ユートピアが本質的に「意識の牢獄」であり、意識の牢獄であるかぎりにおいて、何か凶々しいものにまわりつかれているからです。

私は、私が想像のみによってツムギ出す空間、つまりユートピアの内部において、本質的に新しいことを何も見出しません。つまり、この空間の内部でセイキするのは、少なくとも私にとつては既知のことばかりです。

たとえば、ヨーロッパのどこかの都市にあるようなカクウのゴシック様式の古いカテドラルの内部を心に描いてみます。しかし、私は、視線を上下左右に向けることにより何が見えるか、あらかじめ知っています。なぜなら、教会の内部の物体の配置は、私自身によってあらかじめ決められているからです。

また、教会の天井が何本の柱で支えられているのか、数えてみるとします。しかし、私は、実際に数えなくても、答えをあらかじめ知っています。なぜなら、柱の数を決めたのは私であり、柱の数は、私が決めた数以外ではありえないからです。

現実の構造物、たとえば、ミラノ、パリ、ストラスブル、ケルンなどのカテドラルの内部に身を置く場合、そこには新しい事実、意外な事実の発見があり、言葉の本来の意味における経験に与ることが可能です。これに反し、心に描かれただけのカテドラルの内部を何時間さまよっていても、ステンドグラスの意匠から椅子の素材や疵にいたるまで、私が自分ですべてを決めている以上、いや、決めざるをえない以上、新しいことに出会う可能性は最初から閉ざされていると考えねばなりません。

このように考えてみるなら、ユートピアが意識の牢獄であることがわかります。それは、何よりも、「外部」「他者」というものを持たず、したがって、ただタイクツであるばかりではなく、脱出することが永遠に不可能な空間、トホウもなく息苦しい空間なのです。決して覚めることの

ない夢のようなものであると言ってもよいかもしれません。

ユートピアが意識の牢獄であるのと同じ意味において、絶景もまた、意識の牢獄であり、変化を許さぬものであり、このかぎりにおいて一種のディストピアであると言うことができます。視界から風景画を切り抜く作業により、それは、現実の生活の文脈から切り離され、変化してはならぬものとして固定されることとなります。以前に述べたように、ヨーロッパにおいて、「閉じた庭」は、「楽園」と重ね合わせられてきました。二次元空間に再現された実物大の風景画としての庭園、そして、視界から切り抜かれた風景画としての風景、これら二つが自律的な変化を許さぬものであることは、この意味において、当然であると言うことができます。

一八世紀後半以降のイギリスにおいて試みられたピクチャレスクな旅が絶景の美学にもとづくものであるかぎり、風景論の過激派に代表される旅行者たちが求めたものもまた、勝手な変化を許さぬものであり、変化の痕は修復によって消去されねばなりませんでした。どれほど古いものであっても、彼らの同時代の生活様式を規定しながら、同時代の生活様式の内部において意義と価値を与えられたもの、つまり、生きて自律的に変化するのは、ピクチャレスクではなく、また、風景とは見なされません。ピクチャレスクなものとして絶景を形作るものであるためには、現在からは「I」的な仕方でも切り離され、現在から切り離されたままの状態——いわば「死んだ」状態——で保存されていることが必要でした。自然は勝手に変化してはならず、人工物は、勝手にカチカチたり傷んだりしてはならないこととなります。

ラスキンのシテキを俟つまでもなく、廢墟は、ピクチャレスクの観念が生まれるとともに、ピクチャレスクな人工物の代表としてつねに探し求められ、描写され、さらに、場合によっては、以前に述べたように、造られることすらありました。この事實は、絶景が閉じた庭であり、意識の牢獄であり、ユートピアでもありディストピアでもあることを雄弁に物語ります。そこには、私たちが意識の他者に出会う可能性、つまり、本当の意味における経験に与る可能性は、最初から閉ざされているのです。

絶景の美学から少し距離をとり、厳密に考えてみるなら、私たちが普段の生活において風景として受け止めているものは、作品ではないことがわかります。たとえば、都市の内部に身を置くとき、私たちは、都市の風景に出会います。たしかに、都市の風景を形作る物理的な要素はほぼすべて人工物です。しかし、建物や道路が人工物であり作品であるとしても、これらを物理的な構成要素とする風景は、それ自体としては人工物ではなく、作品でもありません。それは、眺める者の意向とは無関係に、とどまることなく変化しており、また、変化すべきものでもありません。それは、私たちの意のままにならない変化であり、意のままにならない変化を含むことによつて初めて、風景は、本当の意味における風景になるのです。風景を前にするとき、私たちは、本質的に新しいもの、意識の他者に出会うことになるはずで

実際、現代の日本語におけるコミュニケーションにおいて「風景」という言葉を耳にすると、

私たちが最初に想起するのは、目に映る何かが、みずからの内在する原理に従い、眺める者とは無関係に、自律的な仕方で変化して行く様子であるはずです。風景との出会いにおいて、私たちは——さしあたり不知不識しらずしらずであるとしても——意識の他者を予想し期待しているものであり、この予想と期待は、風景というものの真相に合致するものであるように思われます。

風景は、情感的な体験を可能にする装置であるというよりも、本質的には、私たちのあり方をⅡ的に規定するような経験の境域であると考えねばならないように思われるのです。

絶景の美学は、風景の享受が本質的に情感的(ästhetisch)な体験であるという了解を前提とするものでした。風景を評価する尺度が風景画から借用されているという事実、あるいは、風景がスタティックな作品に見立てられている事実は、風景に認められるものが美であるとしても、崇高であるとしても、あるいは、ピクチャレスクなものであるとしても、風景が情感的な仕方で評価されるべきものと見なされていることを雄弁に物語ります。これまで否定的な仕方で取り上げてきた風景観がこの書物において「絶景の美学」と名づけられた理由もまた、この点にあります。

しかし、風景の享受が本質的には情感的なものとは見なされえぬものであるにもかかわらず、現実には、一九世紀以降、風景は、情感的な認識の対象として、また、「美学」(Ästhetik)のテーマとして繰り返し取り上げられてきました。一九世紀末以降、現在まで、「哲学的」であること(注)を標榜する風景論は少なくありませんが、その大半は、風景の享受が本質的に情感的なものであるという了解をジメいの前提として受け容れていきます。

このような了解が現在にいたるまでⅢ的であるのは、風景と風景の物理的残滓(と)その視覚像(覚像)がたがいに厳密に区別されず、風景の物理的残滓の性格を手がかりとして風景が規定可能であるというふうに漠然と考えられてきたからです。たしかに、厄介なことに、風景を物理的残滓として固定し実体化することは不可能ではありません。

情感的な仕方で把握されるのは、そして、「絶景の美学」が実際に前提としてきたのは、風景が経験されたあとに生まれる物理的残滓とその映像であり、本来の意味における風景ではありません。美学の圏域において風景の問題を主題化するかぎり、「絶景の美学」の引力から逃れることはできないでしょう。また、風景は、風景画や自然環境などの類比によって語られるにすぎぬもの、メイリョウな輪廓(りんかく)を欠いた観念にとどまるに違いありません。

ただ、風景に関し、これを情感的な享受の対象と見なす立場が誤りであるとしても、それでも、この立場には、誰にも否定することができない真理が一つ含まれています。すなわち、風景の享受が快楽であるというドウサツです。風景がこれを眺める者に快楽を与えること、この快楽が風景の本質的に由来するものであること、この一点に関するかぎり、これまでの風景論は、決して間違っではないなかつたと言うことができます。

(清水真木『新・風景論——哲学的考察』による)

(注) カテドラル——カトリックの聖堂。

ピクチャレスク——「絵のような」という意味。「ピクチャレスクな旅」は、自然の景観に風景画の美を見いだすことを目的とした旅のこと。

スタティック——静的。

この書物——本書の第二章において、筆者は「絶景の美学」の概念を提示している。

問1 二重傍線部ア～コのカタカナを漢字に改めよ。(楷書で記すこと。)

ア	ツムギ	1
イ	セイキ	2
ウ	カクウ	3
エ	タイクツ	4
オ	トホウ	5
カ	クち	6
キ	シテキ	7
ク	ジメイ	8
ケ	メイリョウ	9
コ	ドウサツ	10

問2 傍線部a～cの漢字の読みをひらがなで記せ。

a	意匠	11
b	享受	12
c	崇高	13

問3 空欄Ⅰ～Ⅲに入る語として最も適当なものを、次の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。ただし、同じものを二度以上選ばないこと。Ⅰ 14 ・ Ⅱ 15 ・ Ⅲ 16

- ① 暫定      ② 相対      ③ 根本      ④ 決定      ⑤ 支配

問4 傍線部A「ユートピアが本質的に『意識の牢獄』であり」とあるが、なぜ「意識の牢獄」だと言えるのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

17

- ① デイストピアと一体化したものであるユートピアは、私にとってはすべて既知の世界であり、外部や他者と切り離された世界に私を閉じ込めるために作り出された空間だから。
- ② ユートピアでは、それを作り上げた私にとってはすべて既知のことであり、本来の意味での経験に与<sup>与</sup>ることもできず、そこから永遠に抜け出ることできないから。
- ③ ユートピアとは、現実の空間をもとに、想像を交えて私が意識の中で作り上げたものであり、私にとってはすべてが既知で、新しいことに出会える可能性が閉ざされているから。
- ④ ユートピア小説が、実はデイストピア小説として書かれたものであったように、ユートピアでは新しい事実や発見との出会いが皆無であり、極めて息苦しい空間に過ぎないから。
- ⑤ ユートピアとは、私によってあらかじめすべてが決められている空間であり、その意味で新しい出来事や変化がなく、いわば実現しない夢のような空間であると言えるから。

問5 傍線部B「絶景もまた、意識の牢獄であり」とあるが、なぜ絶景も「意識の牢獄」だと言えるのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

18

- ① 絶景とは風景論の過激派である旅行者によって求められたもので、勝手に傷んだりすることも許されず、修復の痕もきれいに消去されなければならないから。
- ② 絶景とは、同時代の生活様式を規定していた独自の美学によって求められ、価値を付与されたもので、閉じた庭である廃墟などと同様、一種のデイストピアだから。
- ③ 絶景とは、現実の生活の文脈から切り離されたまま固定されたもので、自律的に変化することが許されず、いわば死んだ状態で保存されることが求められるから。
- ④ 絶景とは、視界から風景画を切り取るように、変化してはならぬものとして固定され、その時代の生活様式の内部において意義づけられた人工物に過ぎないから。
- ⑤ 絶景とは、楽園と同じく視界から切り離され、三次元的に再現されたもので、自律的な変化も人工的な修復も許されず、昔のありのままの姿として固定されているから。



問6 傍線部C「風景は、それ自体としては人工物ではなく、作品でもありません」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 19

① たしかに都市内部に身を置く場合、ほとんどすべてが人工物であるが、通常私たちが想起する風景とはそれだけでなく、自然物をも含んだうえで、それを眺めるものとは無関係に存在するものを風景と呼んでいるから。

② 人工物である物理的構成要素によって風景を形成することには限界があり、それはとどまることなく変化するもの、また変化すべきものなので、風景は人工物ではなく、意識の他者と言うべきだから。

③ 日常のコミュニケーションにおいて取り上げられる風景を考えれば、それは人間が作ったものではなく、人間にとつての他者であり、出会うことを予想もしなかった他者に出会っているというのが真相だから。

④ 日常の感覚を離れ、風景というものを厳密にとらえれば、それは決して私たちの意のままになるものではなく、風景自体に内在する原理に従う、一種の他者であるというのが本質だということがわかるから。

⑤ 絶景の美学にとらわれず、私たちの生活における風景を考えるなら、物理的な構成要素が人工物であったとしても、風景自体は人工物ではなく、内在的な原理に従って、絶えず変化する意識の他者だと言えるから。

問7 傍線部D「絶景の美学」について、筆者はどう考えているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 20

① 絶景の美学は、風景の本質を情感的なものとしなす過ちをおかしており、元来実体化できない風景を視覚像によって規定しようと考えているため、到底肯定することはできない。

② 絶景の美学が現在にいたるまで多くの支持を得ていることは否定できないが、誤ったとらえ方を前提にしており、観念としての風景の輪廓を失うものであるため認めがたい。

③ 絶景の美学には、確かに真理が含まれているが、風景を情感的体験としてとらえたため、風景そのものと、その物理的残滓を混同するという誤った認識を生じさせた。

④ 絶景の美学が、美学をモデルとして風景を評価しようとしているのは間違っているが、風景の享受が快樂であるということは、風景の本質ではないが、認めざるをえない。

⑤ 絶景の美学は、一点の真理を含むが、風景を美学や情感の問題としてとらえ、本当の意味での風景ではないものを手がかりとして風景を規定しようとしている点は肯定しがたい。

問8 本文の内容に合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

21

- ① 絶景が意識の牢獄でありディストピアであるとすれば、ピクチャレスクな旅を求めた過激な旅行者たちは、意識の牢獄によってみずからの生活を規定していたと言える。
- ② 私たちは、意識の牢獄である絶景の美学から距離をとって、風景をとらえ直す必要があり、そうすることで風景と人間との新たな関係を見出してゆくことも可能となる。
- ③ 風景の本質は絵画や自然環境との類比によってとらえられるものではなく、生きて自律的に変化し、私たちのあり方を規定していく経験として考えるべきである。
- ④ 本来の風景は意のままにならないものであり、私たちは風景を美学ではなく哲学的な観点から厳密に考えて、意識の他者に出会えるよう努めなければならない。
- ⑤ 死んだ状態で保存されていることに価値がある廃墟が「造られる」のは矛盾だが、そのことは逆に絶景が必ずしも閉じられたものとは限らないことを示唆している。



## 第2問

次の文章は『発心集』の一節で、西行の娘を預かって養育していた冷泉殿が、その娘を働きに出したことを、西行が聞き知った場面である。これを読んで、後の問いに答えよ。

西行、このことをもれ聞きて、本意まことならず覚えけるにや、この家近く行きて、傍らなる小家に立ち入りて、人を語りひて、忍びつつ呼ばせける。娘、いとあやしくは覚えけれど、ことさまを聞くに、「わが親こそ、聖アになりてありと聞きしか。さらでは、誰たれかはわれを呼び出でん」と思ふに、「日ごろ、見てや止やみなんと心憂かりつるを、もしさらば、いみじからん」と覚えて、やがて使ひに具して、人にも知られず出でにけり。

かしこに行きて見れば、あやしげなる法師の、瘦せ黒みたる、麻の墨染すみぞめの衣・袈裟けさなど、まことにあはれに覚えて、涙ぐみつつ、こまやかにうちとけ語らふ。西行は、ありし土遊びの時きと見しに、あらぬものに生ひまさりて、いと清げなるを見るにも、さこそ思ひ捨つる世なれど、さすがにこればかりをばえ見過ごさず。ことの有様など聞きて、娘に言ふやう、「年ごろは行方も知らず、姿をだに、今日こそ初めて見るらめ。されども、親子となるは深き契りなり。わが申すこと聞きてんや。違なへらるまじくは言はん」と言ふ。娘の言ふやう、「まことに親にておはしまさば、**X** 違へ奉るべき」と言ふ。「しかあらば申さん」と言ふ。「その生まれ落ちしより、心ばかりははぐくみしことは、おとなになりなん時は、御門イの后ごうにも奉り、もしは、さるべき宮ばらのさぶらへをもせさせんとこそ思ひしか。かやうの次の所に、まかなひせさせて聞こえんとは、夢にも思ひよらざりき。たとひ、めでたき幸ひありとても、世の中の仮なる様、とにかくに心やすきこともなかんめるを、尼になりて、母が傍らに居て、仏の宮仕へうちして、心こゝろにくくってあれ **Y** と思ふなり」と言ふ。

やや久しくうち案じて、「承りぬ。はからひ給はせんこと、**X** 違へ奉らん。さらば、いつと定め給へ。その時、いづくへも参り会はん」と言ふ。「若き心に、ありがたくもあるかな」と、返す返す喜びて、しかじか、その日、乳母のもとへ行き会ふべきこと、よくよく定め契りて、帰りぬ。

このこと、また知る人もなければ、誰も思ひもよらぬほどに、明日になりて、「この髪を洗は**Z**」と言ふ。冷泉殿の聞きて、「近う洗ひたるものを。けしからずや」など言はれければ、ただことさらに言へば、「物詣ウでやうのことなめり」と思ひて、洗はせつ。

明くる朝に、「急ぎて乳母のもとへ行くべきことのある」と言へば、車など沙汰して送る。今すでに車に乗らんとする人の、「しばし」とて帰り来て、冷泉殿エに向かひて、つくづくと顔うち見て、言ふこともなくて立ち帰りき。車に乗りて去ぬ。あやしく覚ゆれど、かかることあるべしとは、**X** 知らん。

かくて、久しく帰らねば、おぼつかなくて尋ねけるを、しばしはとかく言ひやりけれど、日ヒごろ経れば、隠れなく聞こえぬ。冷泉殿は、五つより、ひとへにわが子のやうにして、片時かたは

ら離ることなくて、ならばははぐくみ立てたるうちにも、おとなびゆくままに、心ばへもはかばかしう、ことにふれてありがたきさまなりければ、深くあひ頼みて過ぎけるに、かく思はずして永く別れぬれば、「恨めしかりける心強さかな。<sup>(注)</sup> 武士者の筋といふもの、女子まで、うたてゆゆしきものなりけり」と言ひ続けてぞ恨み泣かれける。「ただし、少し罪許さるることとは、すでに車に乗りし時、『また見まじきぞ Y』』と、さ<sup>か</sup>すがに心細く思ひけるにこそ。させる言ふべきこともなきに、しばし立ち歸りて、わが顔をつくづくとまもりて出でにしばかりを、恨めしき中に、いささかあはれなる」とぞ言はれける。

(『発心集』による)

(注) ありし土遊びの時——以前、西行が庭先で遊ぶ娘を見かけた時のこと。

さぶらへ——そば近く仕えること。

次の所——二流の所。

まかなひ——下働き。

武士者の筋——武士の血筋。出家する前の西行は武士であった。

問1 傍線部ア～ウの古語の読みを、現代仮名遣いのひらがなで記せ。

ア 聖 22

イ 御門 23

ウ 物詣で 24

問2 波線部あゝおの語句の本文中での意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。

あ 本意ならず

25

- ① わけがわからない
- ② 望むところではない
- ③ 許すことができない
- ④ つらく情けない
- ⑤ がまんできない

い やがて使ひに具して

26

- ① あたかも使いに行くようなふりをして
- ② そのまま使いに出かけようとして
- ③ そこで使いの者と相談して
- ④ すぐに使いの者と連れ立って
- ⑤ まもなく使いの者が連れに来て

う あやしげなる

27

- ① きまりが悪そうな
- ② 疲れているような
- ③ みすぼらしい様子の
- ④ 気味の悪い様子の
- ⑤ もの寂しい様子の

え 心にくく

28

- ① 奥ゆかしく
- ② 似つかわしく
- ③ 尊く
- ④ もったいなく
- ⑤ 親しみやすく

お あやしく覚ゆれど

29

- ① 気がかりに感じられたが
- ② 残念に思われたけれども
- ③ 異常にお感じになったが
- ④ 不都合にお思いになるが
- ⑤ 不審に思われるけれども

問3 空欄 X に入る語句として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。ただし、空欄 X は三か所ある。 30

- ① さだめて      ② いかばかり      ③ をさをさ      ④ いかでか      ⑤ まさに

問4 空欄 Y ・ Z に入る終助詞として最も適当なものを、次の①～⑥のうちからそれぞれ一つずつ選べ。ただし、空欄 Y は二か所ある。 Y 31 ・ Z 32

- ① かな      ② ばや      ③ がな      ④ なむ      ⑤ てしがな      ⑥ かし

問5 傍線部が「さすがに心細く思ひけるにこそ」についての文法的説明として適当でないものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 33

- ① 単語に分けると六語である。  
② 副詞が一語ある。  
③ 「心細く」は形容詞の連体形である。  
④ 助動詞が二語ある。  
⑤ 「こそ」は係助詞で、結びの語は省略されている。

問6 傍線部 A 「日ごろ、見てや止みなんと心憂かりつるを、もしさらば、いみじからん」に表れている娘の心情として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 34

- ① 父親に会えるのではないかと期待に胸をふくらませている。  
② 再び父に会えるのは信じがたいことなので驚いている。  
③ 父とはもう再会できないに違いないと悲しみに沈んでいる。  
④ 父を探すつもりだったのに訪ねて来てくれたので感謝している。  
⑤ もし父でなかったらどうしようかと不安で心が動揺している。

問7 傍線部 B 「さすがにこればかりをばえ見過ごさず」に表れている西行の心情として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 35

- ① 出家せずに娘と一緒に暮らせばよかったと後悔している。  
② 出家した者として修行が足りないことを痛感し反省している。  
③ 久しぶりに会って美しく成長した娘を見て感激している。  
④ 出家のためとはいえ娘を手放したことをすまないと思っている。  
⑤ 立派になった娘に偶然に出会えたことを感謝している。

問8 傍線部C「わが申すこと聞きてんや」の解釈として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 36

- ① 私がお話しすることを聞き入れることはできないだろう
- ② 私がお話しすることはきつと聞いたことがあるでしょう
- ③ 私が言うことをたぶん聞き入れてくれるだろう
- ④ 私の申したことを聞いたことがあるだろうか、いや、ないだろう
- ⑤ 私の申しますことを聞いてくれないか

問9 傍線部D「夢にも思ひよらざりき」とは、どのようなことに対して言ったものか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 37

- ① 娘を御門の後にさせたいと思っていたのに、今も冷泉殿の世話になっていること。
- ② 娘が冷泉殿の元から離れて苦労しているのを知って、出家させる気になったこと。
- ③ 娘が幼い時は親元で幸せであったのに、今は離れ離れになつて苦労していること。
- ④ 娘を高貴な人に仕えさせたいと思っていたのに、今は二流の所に出仕していること。
- ⑤ 娘が親の許しを得ることなく勝手に、冷泉殿の元から別の所に移つて出仕していること。

問10 傍線部E「冷泉殿に向かひて、つくづくと顔うち見て、言ふこともなくて立ち帰りき」とあるが、この時の娘の気持ちとして**適当でないもの**を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

38

- ① かわいがつて育ててくれた養母に、自分が去つていく事情を話すことができずに無言のまま別れていくことを、申し訳なく思っている気持ち。
- ② 自分をわが子同様に育ててくれた養母との幸福な暮らしから、急に引き離されて出家させられたので、無念で悔しく思っている気持ち。
- ③ 父に勧められた出家するという自分の新しい人生へ歩み出すにあたり、立派に育ててくれた養母に、心から感謝している気持ち。
- ④ 長い間いつくしみ育ててくれた養母とは、これが最後で再び会うことはできないと思われ、今後も養母が無事であることを願っている気持ち。
- ⑤ 養母は自分をわが子のように自分は養母を実母のように、互いに深く頼みに思つて暮らしてきたので、名残惜しく思っている気持ち。

問11 傍線部F「おぼつかなくて尋ねける」の動作の主体として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 39

- ① 西行
- ② 娘
- ③ 冷泉殿
- ④ 乳母
- ⑤ 母

問12 傍線部G「日ごろ経れば、隠れなく聞こえぬ」の解釈として最も適当なものを、次の①～

⑤のうちから一つ選べ。 40

- ① 何日か過ぎるうちに、娘が無言で別れて行った理由がわかるだろう
- ② 数日が過ぎたが、娘が出家したかどうかはつきりとはわからなかった
- ③ 何日も過ぎていくので、娘が立ち去った真相がわかるに違いない
- ④ 数日が過ぎると、娘が出家したことがはっきりとわかった
- ⑤ 何日も過ぎてから、やっと娘が無事に父に会えたことを伝え聞いた

問13 この文章から読み取れる娘の人物像として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 41

- ① 武士であった父に厳しく育てられたので、出家せよという父の命令に背くことができません。やむなく養母と離別した、従順な人物。
- ② 大切に育ててくれた養母に事情を告げるべきか、自分では決められず、父の勧めるままに立ち去った、優柔不断な人物。
- ③ 娘に対する父の思いや出家を勧める言葉をしっかりと受け止め、納得がいくと毅然きぜんとした態度で出家した、潔い人物。
- ④ 父の説得で出家を決心するが、わが子のように育ててくれた養母に反対されると思ひ、理由も告げずに立ち去った、薄情な人物。
- ⑤ まだ人生経験に乏しくて、出家した後の生活について理解してはいなかったが、出家した父の跡を継ぐ決心をした、無欲な人物。

問14 『発心集』についての説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

42

- ① 平安時代に成立した物語で、実在した人物についての逸話が多数収められている。
- ② 鎌倉時代に成立した仏教説話集で、作者は『方丈記』で知られる鴨長明である。
- ③ 鎌倉時代に成立した説話集で、仏教説話だけでなく世俗的な説話も多く含まれている。
- ④ 江戸時代に成立した紀行で、作者の旅の様子が虚構も含めて描写されている。
- ⑤ 江戸時代に成立した読本よみほんで、上田秋成が書いた短い物語が多数収められている。

(国語の問題は終わり)